

「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」における委員の主な発言内容

1. 生涯学習の意義・役割

○ 高齢化と生涯学習

- ・ 人生 90 年時代と人生が長くなったことで、生き方にも自由度がでてきた。このような中で、生涯学習を見直すことは大変重要。
- ・ 単に高齢者の教育をどうするかということだけでなく、大きな社会システムの変更が迫られている中で生涯学習の在り方を考えることが必要。

○ 超高齢社会における生涯学習の意義・役割について

- ・ 人生の後半では、健康や経済状態、ライフスタイル等も多様化しており、個々人が生涯学習を通じて人生設計をしていく必要がある。
- ・ 単に知識を蓄えるというものではなく、自らが新しく変わっていくという感覚を持つことが学びの基本であるという共通認識を図ることが重要。それにより流動化する社会にも対応が可能となる。また、若者も含め幅広い世代について考える必要がある。
- ・ 生涯学習を通じて、孤立をなくし、地域の人と人とのつながりを再構築していくという観点も重要。また、経済的な視点から考えた場合、生涯学習も生きがい・趣味だけではなく、就労のためのスキルを身につけるという意味でも重要である。

2. 長寿社会における生涯学習の今後の方向性

(1) 多様な学習ニーズに対応した学習機会の提供

○ 学習内容及び方法の工夫・充実

- ・ 税金を投入して行政がやっていく以上、学習内容は時代に即したものに変わるべき。
- ・ 定年後の長い人生を生きていく中で、どのような内容の生涯学習を行うかが重要であり、カリキュラムを含めて考えていく必要がある。活動と学習を繰り返しながら、元気な人生を生きていくことが大切。
- ・ 学齢期における学習と高齢期における学習内容では自ずと異なる。高齢期では、健康状況や経済状況が異なるとともに、価値観が多様化しており、どのような学習内容、方法を提供していくかについて検討が必要。

○ ライフステージの特性に配慮した学習機会の提供

- ・ 生涯学習が世代によって色々な意味を持ってきている。地域貢献のための学びを施策としてやっていくのであれば、魅力のあるカリキュラムを提供するなどして、その意義を明確化していく必要がある。
- ・ 退職後、地域活動に参加したいと思ってもどうすればいいのかわからない高齢者も少なくない。高齢者になってしまってから学習も重要であるが、30代や40代など働き盛りの世代が高齢期に入る前から、生涯学習などで意識付けを行うとともに、PTA活動を始めとした地域活動を経験しておくことも重要。その場合、プレ高齢者が

参加しやすい環境整備を行うことが必要。

- ・ 年代において学ぶ意義は異なる。65歳と95歳の人では大きな違いがあり、10歳ごとに年代を分けて多様性のあるものとして考えていく必要がある。
- ・ 後半人生における第二の義務教育として、生活設計や人生設計を学ぶ機会を提供することが必要。

○ 学習が困難な者への支援

- ・ 学習の場に来られる高齢者だけでなく、来ることのできない高齢者への支援も考えていかなくは、机上の空論になってしまう。これまでのような集まる型の学習だけではなく、健康に不安を抱えていて参加できない人のためのアウトリーチ型の届ける学び・出会いが必要。
- ・ 学習活動に参加したくないという高齢者がいる中で、どのように生涯学習に対する理解を深めるかを考えることも大切である。

○ 世代間交流の促進

- ・ 高齢者が子どもたちと交流することにより、元気もでるし、生きがいも生まれる。高齢者のみが集まって学習するよりも、子どもたちとの交流ができる施設が必要。
- ・ 高齢者と若者との交流をとおして、若者の価値観が変わり、高齢者も若者に対する考え方が変わるという面があり、世代間をつなげるようなプログラムの工夫が必要。

○ 高等教育機関等との連携

- ・ 学習する場としては、大学での学びやICTの活用による家庭での学習など選択の自由を与えることも重要。

(2) 社会参画の促進

○ 生涯学習を通じた社会参画の促進

- ・ 学習の目的は自己実現であり、学ぶ前提として社会貢献は権利であり義務である。
- ・ 高齢者大学への入学の動機は、興味関心とまちづくりや協働の担い手になりたいという2つに大きく分けられる。まずは興味関心の講座から、まちづくりに関係する講座へと徐々に移行するやり方が有効ではないか。

○ 地域課題と個人の持つ資源をマッチングできる人材の養成

- ・ 暮らしや様々な活動の実践とのマッチングが重要。きっかけがない、働ける場所がわからないという人も多いので、そういった人を導けるインストラクターやコーディネーターのような人材が必要不可欠。

○ 関係機関相互の連携

- ・ 長寿社会の生涯学習においては、地域というキーワードが重要。生涯学習行政が他部局と連携していく中で、地域の学びと実践、暮らしと支え合いが実現していく。
- ・ コミュニティ・スクール型の小中学校では、高齢者が授業やクラブ活動の支援にあたり、自己実現を行っている。学校教育と生涯学習の連携もこれから可能性がある。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会について

1. 趣旨

高齢者の生涯学習及び社会参画の現状と課題について整理するとともに、超高齢社会においてプレ高齢者を中心とする成人が取り組むべき学びの在り方について検討を行う。

2. スケジュール

- 9月26日（第1回）審議内容：超高齢社会における生涯学習と社会参画の現状と課題
11月2日（第2回）審議内容：超高齢社会における生涯学習の意義及び役割
12月21日（第3回）審議内容：生涯学習を通じた社会参画
生涯学習の体制整備（関係機関との連携の在り方）
1月19日（第4回）審議内容：超高齢社会における生涯学習の在り方
※骨子案の審議
2月3日（第5回）審議内容：超高齢社会における生涯学習の在り方
※まとめ（案）の審議
2月下旬（第6回）審議内容：超高齢社会における生涯学習の在り方
※まとめ（案）の審議

3. 委員名簿（※は座長）

※秋山 弘子	東京大学高齢社会総合研究機構特任教授
石川 正夫	社団法人全国公民館連合会常務理事兼事務局長
市川 恵子	中野区健康福祉部スポーツ分野 （兼務）中野区教育委員会事務局社会教育主事
内海 房子	独立行政法人国立女性教育会館理事長
菊池 いづみ	長岡大学経済経営学部准教授
清原 慶子	三鷹市長
澤岡 詩野	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員
末竹 正男	社団法人全国シルバー人材センター事業協会事務局長
高畑 敬一	NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ会長
多田 正見	江戸川区長
二宮 皓	放送大学副学長
馬場 英司	兵庫県いなみ野学園長
樋口 恵子	NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長
堀田 力	公益財団法人さわやか福祉財団理事長
堀 薫夫	大阪教育大学教育学部教授
牧野 篤	東京大学大学院教育学研究科教授
山田 秀昭	社会福祉法人全国社会福祉協議会事務局長

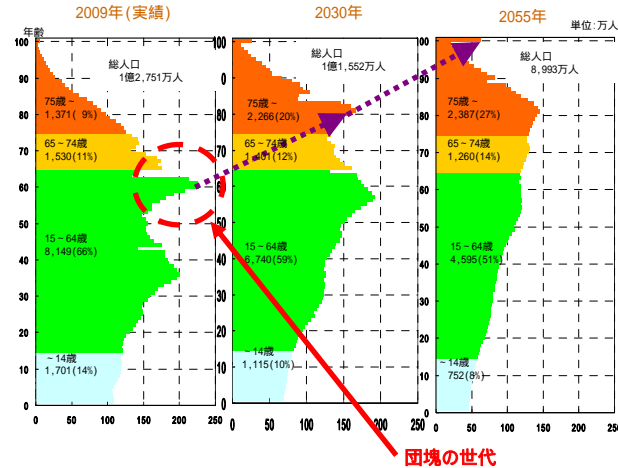
我が国の高齢化の現状と課題

高齢化の現状

高齢化の進展

高齢者は増加し続け、一方、生産年齢人口は減少の一途

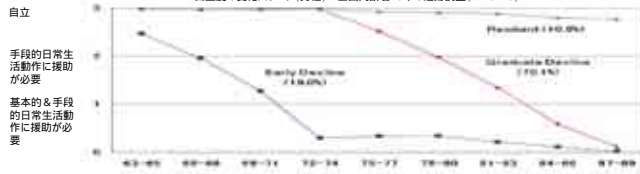
(高齢者の割合: 2009年(4人に1人) 2055年(2.5人に1人)
(資料: 総務省「国政調査」(平成22年度))



高齢者の大半は70歳以降自立度が低下

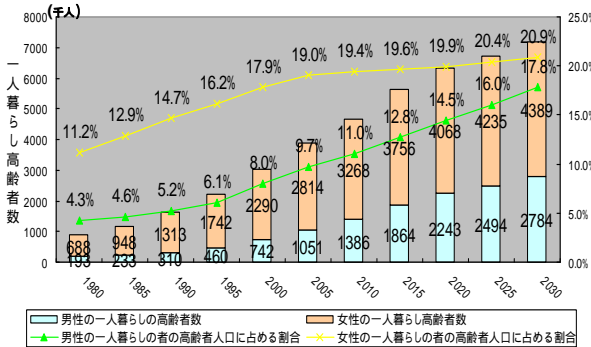
(資料: 秋山 弘子 長寿社会の科学と社会の構想「科学」 岩波書店、2010)

自立度の変化パターン(男性) - 全国高齢者20年の追跡調査(N=5715) -



家庭、地域社会の変容

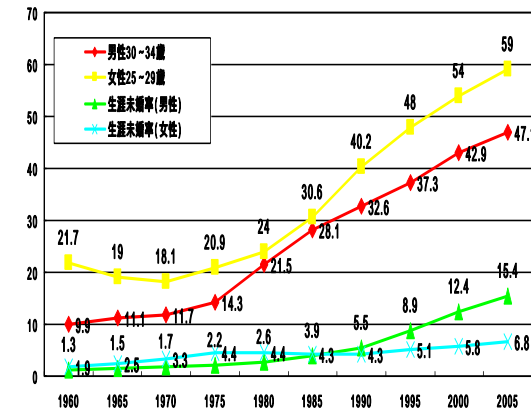
急増する高齢者の単独世帯



資料: 2005年までは総務省「国政調査」

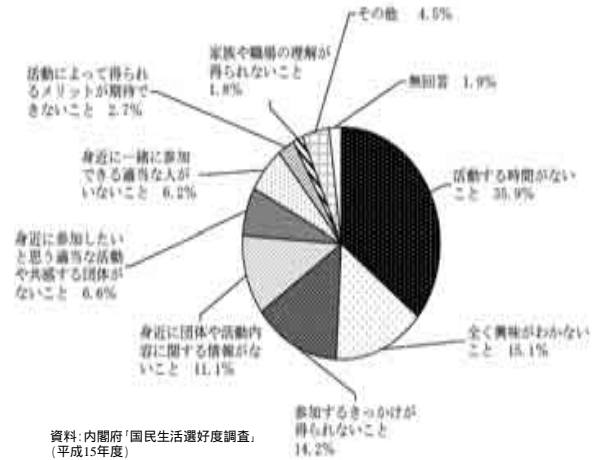
2010年以降は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(平成20年3月推計)」

未婚、離婚の急増による家族ネットワークの弱体化



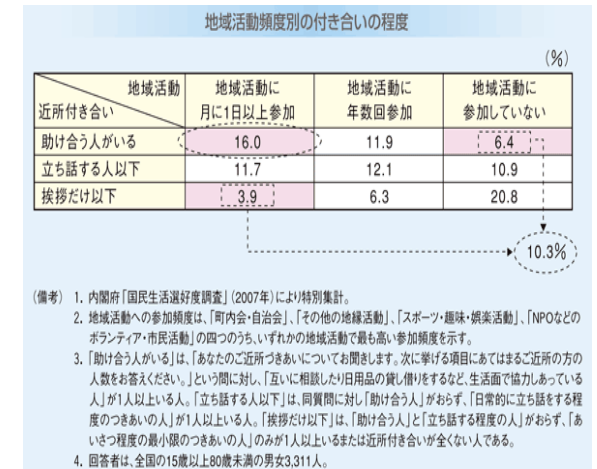
資料: 国政調査(総務省)

地域の活動を妨げる要因としては、「多忙」が約4割。



資料: 内閣府「国民生活選好度調査」(平成15年度)

地域のつながりを持っている人は全体の16%。



超高齢社会における課題

地域コミュニティの衰退

青壮年層の減少や後期高齢者の増加により、地域社会の維持運営で基盤である自治会、町会等が劣化し、伝統文化催事、祭、防犯・消防・自主防災活動、介護見守りなどの機能が衰退。

つながりの希薄化

都市化、核家族化など様々な要因により地縁が希薄化(ソーシャルキャピタルの低下)。これにより、例えば、虚弱な高齢者や老老介護世帯など支援が必要な者への見守り機能が低下し、高齢者の社会的孤立が増えることが懸念。

QOL志向の高まり

成熟社会においては、高齢者の生活の高質化(QOL)志向が高まっており、定年退職後の健康余命の有効活用が課題。

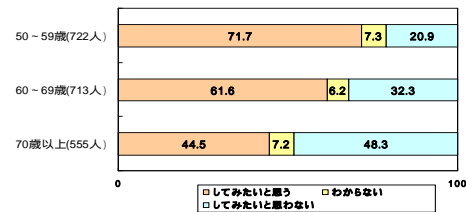
高齢者の学び及び社会参画に関する課題

高齢者の学びに関する課題

高齢者の生涯学習への意欲は高いものの、実際に参加しているのは約2割。参加したいが参加できていない4割の高齢者を如何に生涯学習に引き込むか。

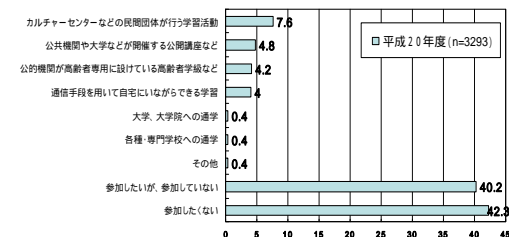
高齢者の生涯学習に対する今後の動向

資料：内閣府「生涯学習に関する世論調査」（平成17年）



高齢者の学習活動への参加状況(複数回答)

資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（平成21年）



学習機会の提供は、十分とはいえず、学習内容にもミスマッチが発生している。学習者のニーズを踏まえつつ、必要な人に必要な情報を如何に提供していくか。

限られた学習機会(学習者の固定化)

地域における学習者の固定化
社会教育施設、特に公民館などは、地域住民にとっては身近ではあるが、イメージの転換を図らないと利用層が固定化される傾向にある。

限られた学習施設
学習者の固定化の影響もあり、地域によっては、利用状況が飽和状態のところもある。特に、高齢者大学など定員が定められているようなところは、年単位での学習がベースとなっており、近くに学習施設がないなど学びたいが学べない高齢者も。

学習内容のミスマッチ(多様な学習ニーズ)

高齢者は多様な人生経験と価値観を持つ世代
世代層・性別・健康状況・経済状況・社会的地位などにより異なる学習ニーズへの対応。(どこに焦点を当て、何を目的とするか。)
仕事で忙しいプレ高齢期にある人を如何に取り込むか。

多様化する学習観
知識・技能の高度化のための学び、社会・政治状況の変化に対応・参加するための学び、安全、安心に生きていくための学び、経済的・時間的なゆとりを背景とした趣味的・文化的なもの(健康、スポーツ含む。)

多数の参加が見込まれる内容と行政が求める必要課題等に関する内容との乖離をどのように是正するか。

高齢者の学習活動の成果をどのように評価するか。特に非生産的な視点をどのように評価するか。

生産的な視点

医療費の抑制
生涯学習を通じて、元気な高齢者を増やすことで結果的に医療費の抑制につながることを期待。

消費性向の向上
元気な高齢者が増えることによって、消費の喚起を図り、地域の活性化につながることを期待。

非生産的な視点

個人の内的な成長
生涯学習を通じて、個人のスキルアップが図られる。

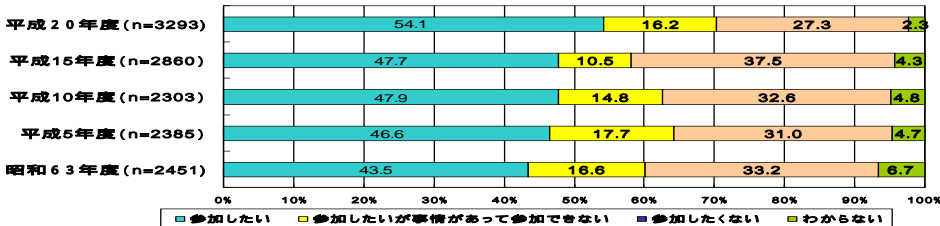
地域社会への貢献
身につけた知識を若い世代に伝えたり、地域の社会活動に参画することにより貢献。

高齢者の社会参画に関する課題

高齢者の5割強が地域社会への参画に意向。事情があって参加できない者を含めると約7割

地域活動への参加の意向

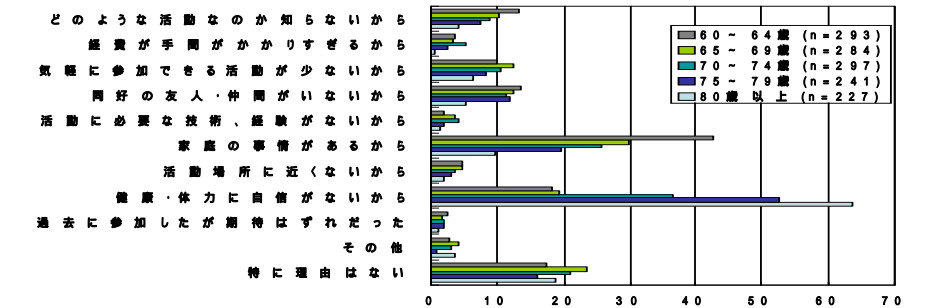
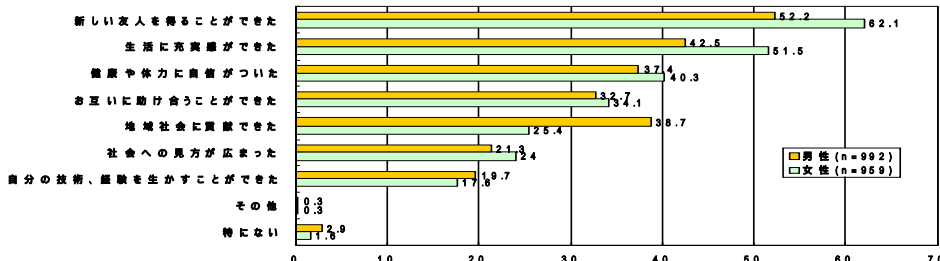
資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（平成21年）



社会参画の効果としては、友人ができたこと、生活に充実感ができたことが多い一方で、地域に参加しなかった理由として、友人がいないこと、活動に関する情報がないことをあげている者も多い。

地域活動全体を通じて参加して良かったこと

資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（平成21年）



地域活動への参加意欲が高い高齢者であっても、実際には、どのような活動があるのかわからない、自分に何ができるのか、何が向いているのかわからないという意見が多く、情報やきっかけがないために活動する場を得ることが困難な人が多いのが現状。